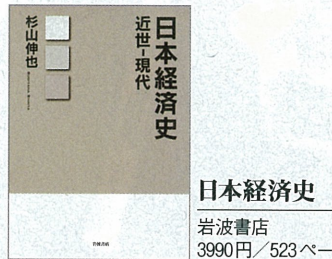


『日本経済史』を書いた

慶応義塾大学経済学部教授

杉山伸也氏に聞く

著者 すぎやま・しんや ●1949年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業、同大学院経済学研究科修士課程修了。ロンドン大学でPh.D.取得。ロンドンサイエンス・オブ・エコノミクス専任研究員を経て、慶応大学助教授、91年より現職。著書に『Japan's industrialization in the world economy 1859-1899』（日経賞）。



混

迷の時代から脱出するには歴史に学ぶことだといわんばかりに、歴史書の刊行が盛んだ。40年を通観する本書は「政策を先送りすればするほど選択肢は減っていく」事実を随所で描き出す。

——参考文献一覧まで入れると600ページ近い大著です。

日本の近代化を準備した近世から、近代を経て現代までのほぼ400年を書いた。逆に日本経済の400年はこんなものかという人もいる

かもしれない。

——なぜ江戸時代から。

国として統一された江戸時代から始めないと、今の日本経済は議論できない。江戸時代には開港以降の経済成長の基盤ができていた。しかも、国際収支、財政収支をキーワードとして苦難の連続性が読み取れる。自分の専門は貿易史であり、その視点からストーリーを組み立てるのに、徳川時代にさかのぼらないわけにはいかない。

——徳川時代？

対象から外れ、その後は空白。日清戦争関連で急に出てくる。国外の枠組みを押さえずには、国内の議論もできないはずだ。

——明治期は元勳が経済理論を知っていたかのようですね。

ほう、と思わせるのは、大久保利通や大隈重信が外資を導入せず、財政とバランスさせようとしたことだ。今の経済理論でいえば、貯蓄投資バランスを経験的に知っていたの

展望を示せてこそマクロの歴史研究者

次世界大戦の前に日本はデフォルトの危機に瀕した。かろうじて救ってくれたの



撮影：尾形文策

きていたからだ。

——現代を議論できないとは？

この400年を、日本の経済と国際経済との距離が広がったり縮まったりしていく関係性でとらえるとわかりやすい。明治の国家目標は、列強に囲まれた中で「独立の維持」と、「欧米との対等」の二つだった。

政策を先送りすれば 選択肢は減っていく

そのための条約改正であり、欧米と同じ金本位制の確立だった。欧米と対等にはなつたものの、金本位制維持には日本の経済力はまだ十分ではない。外見だけは整えても、財政的には苦しい。実はこの状況は戦後の高度成長で緩和されるまで続いた。

——連続性と不連続性も本書のキーワードですね。

ストックとレガシー、つまり何を引き継ぎ、何が断ち切られたのか、を知るのには、歴史をマクロ的にとらえる際に重要な視点といえる。

たとえば徳川幕府は低く評価され、明治政府は高く評価されてきたが、実はその差はそんなにない。徳川幕府は意外に世界の情報をよく集

がその大戦だった。

第1次大戦の後、日本は国際収支が改善して、債権国になった。すぐに金本位制に復帰すれば、米国とともに世界経済の中で主導権を握る可能性があった。ところが、それを先送りしていく。リーダーシップの一翼も担うことができなくなる。

——高橋財政の評価もまた……。

どちらかといえば井上準之助派といわれている。その時代には通貨の発行が裁量的となり、管理通貨制度になった。高橋是清のときにはそれなりに抑えられていたが、馬場鏝一や結城豊太郎になって、日本銀行が無制限に通貨を発行しインフレになってしまふ。財政規律という視点から高橋の財政政策には批判的だ。

——400年を通観してのメインメッセージは。

政策を先送りすればするほど選択肢は減っていくという事実だ。

英国在住が長かったが、英国が欧州で主導権を握れないのは最初の段階で経済共同体に参加しなかったからだ。そういう組織やシステムには最初から入るべき。途中でやめてもいい。選択肢を多く残せるような方向でいくのが重要だ。TPP（環太平洋経済連携協定）もそうではないか。展望を示せるのがマクロの歴史研究者の役割だと思っている。

（聞き手・本誌・塚田紀史）

も見方がユニークです。松方について議論はほとんどが国内に限定されている。実は国際経済と調整していたところが重要な意味を持っている。今までの日本の対外関係史は、外国貿易は開港止まりで議論の

めていた。徳川幕府がさほど無知ではなかったことは、安政の5カ国条約の抵抗の跡からもかなりうかがえる。明治政府は上層部に薩長土肥出身が多いとはいえ、中堅以下は幕府の関係者であり、知的な能力のある人は幕府にもたくさんいた。渋沢栄一にしても旧幕臣。人的な連続性は明治期に至っても強い。司馬遼太郎のように対立的になると、面白いかもしれないが、現実とはかなり違う。

——通説を見直すべきですか。

たとえば先述の綿紡績がうまくいったのは政府が力を入れたからだという見方がある。しかし明治政府は財政基盤がさほど強くない、そんな資金的な余裕はない。むしろ相手国の要求で輸入関税を低くしたことが、日本の織物業にとってプラスになった。輸入綿糸を使って新たに成長していく産地がけっこう出てくる。

——松方デフレについて

も見方がユニークです。松方について議論はほとんどが国内に限定されている。実は国際経済と調整していたところが重要な意味を持っている。今までの日本の対外関係史は、外国貿易は開港止まりで議論の